

放送大学通信

on air

オン・エア

no. 77

発行日 平成17年3月10日

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地 043-276-5111(代)

CONTENTS

〈座談会〉外国語を学ぶ

社会と経済 助教授 山岡 龍一
人間の探究 教授 姫野 昌子
人間の探究 助教授 大石和欣
人間の探究 助教授 宮本 徹
大学通信編集委員会委員長 教授 杉本 大一郎(司会)

1

退任のあいさつ

教授 原 ひろ子 / 教授 橘 玲子
教授 山内久明 / 教授 岩村 秀
教授 岩根 邦男 / 教授 藤田 暁男

5

「放送大学フェア」を 全国生涯学習フェスティバルに出展 岐路に立つアジアの公開・遠隔教育

8

平成17年度開設改訂科目紹介

9

研究室だより

11

Open Forum の刊行について

12

教務のお知らせ

13

14

外国語を学ぶ

〈座談会〉

社会と経済 助教授

山岡 龍一

人間の探究 教授

姫野 昌子

人間の探究 助教授

大石和欣

人間の探究 助教授

宮本 徹

大学通信編集委員会委員長 教授

杉本 大一郎(司会)

必修の外国語にどう 対処する

杉本 今回は外国語を「学ぶ」ということで話をしたいと思います。最近には本が溢れています。今日は放送大学専任の先生から、学生さんが外国語を学ぶのに参考になる話を伺いたいと思います。放送大学の全科履修生には外国語が必修になっているので、その単位をとらないと卒業出来ないということがあるからです。学習センターで学習相談にも携わってこられた山岡先生、学生の悩みなどの話から切りだしてください。

山岡 最大の問題は、何度試験を受けても通らない人がいることです。放送大学では学生が孤立しがちで、一人で悩んでも解決出来ず、袋小路に入ってしまうことがあります。学習相談に来られても、語学が専門でない者がアドバイス出来ることは限



られています。そこで語学の先生方に、どのように勉強するのかということと、どのようにして単位をとればよいか、この2つの疑問を、お尋ねしたいと思います。

杉本 英語が必修というわけではないのですが、英語で単位をとる人が殆どですので、大石先生から。

大石 外国語の必修6単位をなかなかとれなくて苦労している学生さんは多い。比較的とりつき

やすいと思われる英語では、6科目の講義が用意されています。『英語Ⅰ』（平成17年度から『英語基礎A』）は文法的なことが中心です。『英語Ⅱ』は日本の文化を英語で読むという、親しみやすいテーマです。『英語Ⅲ』は日常的な場面で使われる会話、『英語Ⅳ』はイギリス・アメリカの文化的側面が中心です。どれが単位をとりやすいかは、必ずしも番号の順序どおりとは限りません。英語だけで必須の6単位を

そろえるには、放送授業だけだと3つ必要ですが、面接授業の単位も組み合わせることも出来ます。例えば、放送授業2科目、面接授業2科目とか。

いろいろな外国語

山岡 すべてを英語でとる必要はなく、他の言語を組み合わせる方法もあるようです。

杉本 最近是中国語が流行っています。逆に韓国や中国では日本語が流行っています。

宮本 韓国語、中国語というアジア系の言語を選択される方が、英語に次いで多いようです。両者とも漢字で表記されますし、日本語と共通の語彙も多い。文法も語尾変化がない点で、インド・ヨーロッパ系の言語に比べて労力が少なくて済むと言えるでしょう。発音は漢字の音読みのような感じで暗記していけば、それほど難しいものではありません。

杉本 だけど四声というのがあって、音はずいぶん難しい。

宮本 四声は基本的には一つ一つの漢字について覚えていくしかありません。私達が一般に中国語と呼んでいる北京語には、4つの声調がありますが、例えば広東語は9つに分かれています。それに比べると北京語は単純だし、音節の数もそれほど多くありません。

杉本 放送大学は韓国語も設けています。韓国語はシンタックス、すなわち単語の並び方が日本語と同じで、一対一に対応させていけば良い。それは英語国民が例えばドイツ語を学ぶ場合に似ています。ただし韓国語の単語は、音としては、日本語と違うものが随分ありますね。もう一つ、放送大学で平成18年度開講の準備をしているのに、アラビア語があります。**大石** 世界情勢から見ても、アラビア語は世界の歴史・文化・社会情勢・国際政治を読むために不可欠な外国語です。アラビア語は、文字の書き方や文法と同時に、文化、社会、そして宗教的背景をきちんと学ぶ必要があるのです、TVでの講義を制作中です。

宮本 受講者数は、『英語Ⅰ』は

4000人、中国語は千数百人、韓国語は1700人といったところです。**杉本** 中国は人口が13億人もあるので、世界経済で主要な位置を占めるようになりますからね。**大石** 最近、上海で開催されたアジア公開大学連合（AAOU：本号の別記事参照）の会議に出席しました。そこで見た上海ですが、多くの外資系企業が入って来ているし、人々にもすごいパワーを感じました。これからのビジネスのためには英語だけでなく、中国語を学ぶことも必要でしょう。



◀ **大石和欣**（人間の探究 助教授）

山岡 その外にもスペイン語、フランス語、ドイツ語などいろいろありますが、どれが自分に合っているかを調べるのが大切だと思います。どれが試験に通りそうかも。

遠い言葉と近い言葉

杉本 どういうふうに学んでいくと身につくかという問題があります。姫野先生は「外国語としての日本語」の講義をしておられます。学生の母語と学ぶ言語との関係は裏返しになっていますが。

姫野 外国人留学生に日本語を教えてきました。彼らの出身国はいろいろですが、大人ですし、母語の枠もしっかり出来ています。そこに日本語を入れるのは、苦しいことです。韓国語・モンゴル語・トルコ語などは日本語と文構造が近いので、それらの国の人達は日本語を学びやすい。文字が共通という意味では、中国人は楽ですし、ベトナム語などにも、漢字語彙で共通のものが有ります。英語は普及していますが、言語としては遠いので、日本人は不利な立場にあると言えます。英語国民が日本語を学ぶときは、同様に苦労します。私達日本人は、日本語の発想を切

り離せない。母語と比較、衝突しながら外国語を学んでいく宿命です。でも、それを苦勞と思わず、考え方の違いが分かるのは楽しいと捉えていけば、いい生涯教育になると思います。

杉本 英語は確かに遠いのですが、英語は溢れていて、日常的に接しているという意味では非常に近い言葉になっています。ただ、英語は以前にも習ったが、永年使っていないので、いまさら勉強するのも大変だという話も聞きます。

勉強の進め方

山岡 勉強の仕方に関して、こんなことはやらないほうがよいとかいうことも、現実的なアドバイスとしていただきたいのですが。

杉本 勉強したら出来るようになるのは、ある意味では当然ですから、あまり勉強しないでも身につく方法を考えてほしいですね。

宮本 科目の選択の仕方は、もちろん、人それぞれでいいわけですが、いろんな外国語のⅠだけをつまみ食いのようにとる方が結構おられます。かえって効率が良くないのではないのでしょうか。放送大学でのⅠとⅡは、初級と中級というよりも、初級が2つに分かれているというのが実情に近いので、連続してとっていただきたいと思います。学生にとっても、Ⅰで勉強したことを活かしてⅡをとるのは、効率がいいと思うのですが。

大石 とりあえず印刷教材を手にとってみて中身を確認する。そして自分にとって興味があるか、理解ができそうかをみる。

山岡 語学の講義は文化のことも扱っていますよね。その面からも興味が持てるか、あらかじめ調べた方がいいですね。

大石 さきほどからの話のように、英語が言語的にも文化的にも遠いのは確かです。それでも『英語Ⅱ』では「茶の本」を扱い、『英語Ⅳ』では異なる文化の交わり、異文化の読みかたなど、文化の交錯から生じる問題を話題にしています。それは同時に、英語を学ぶことで日本の文化を省みるこ

とでもあります。異文化交流に興味のある方は、それらを選べばよい。本格的に英語を学びたい人には、『英語Ⅴ』（17年度から『英語総合A』）や『英語Ⅵ』が向いています。

使えば身につく

杉本 自然科学は国際的に共通の学問ですから、論文は誰にも読める言葉で書く。近年はほとんど英語です。問題は、大学院に入って論文を書く立場になったとき、からっきし書けない人が多いことです。文化の高尚なことは習ってきたが、自分の論を展開するとか、実験機器の説明書きを読むとか、実用的なことになると、力がついていない。姫野先生は外国人に、日本文化そのものよりも、実用的なことを教えておられると思うのですが。

姫野 留学生は、いま日本という外国にいるわけですから、有利な立場です。ここで生活すること全てが日本語の学習になりますから。それに対し日本人は日本にいて外国語を学ぶのですから、具体的な生活の言葉が身につく場面が少ない。大学教育は高尚な文化的なところから入らざるをえない面があると思います。本当は身体を使いながら学ぶのが速いのですが。

杉本 私は大学生のときにドイツ語やロシア語などを習いましたが、その時はあまり身につかなかった。しかし論文を読んだり、ドイツとかロシアで3ヶ月も暮らしたりするようになると、使えるようになりました。語彙だってすぐに増えます。自然科学関係の人は英語を日常的に読んだり書いたりしていますから、日本語を媒介にせずに、英語を使うことに馴れています。やはり使わないと身につかない。そのあたりが大学教育で欠けているのではないのでしょうか。

大石 一般の人は、日本では外国語を必ずしも常に使う必要はないが、外国に行った場合には使わざるをえない。それによって身体で覚えていく。それに比べて放送大

学で学んでいるときは、受身的な傾向が強く、自分で運用できる場面は少ない。それをどう増やしていくかということです。例えば来年度開講の『英語基礎A』では、日本人が外国人を接待する設定になっています。そこに自分をあてはめて、共感的に外国語を学ぶ。



◀ **宮本 徹**（人間の探究 助教授）

大学の授業は基礎をつくる

宮本 授業の範囲内で学ぶことと、実際に話せるようになることとの間には、距離があります。大学の授業は、実際に使う段になるための、確実な基礎を与えるものとして存在すると思うのです。

杉本 大学で基礎をつけておくと、外国へ行っても怖くない。怖くなければ使うから、芋づる式に出来るようになる。大学の教育は外国語に限らず、ほとんどの科目がそういうものなのです。すぐに役立つ事柄は余りにも多岐にわたるので、全てを扱うわけにはいかない。

姫野 放送大学で学んでいる方達も、いますぐ使うチャンスはないとしても、将来は役に立つ場がある、そのための基礎をやっているのだという楽しみを持っていたきたい。知らない間に知識が蓄積される「潜在学習」ということがありますから、学んだことはどこかに残っていて、必要が生じたときに必ず生きてくると思います。

杉本 日本では初等中等教育の頃からコンプレックスを持たせるといふ問題もあると思うのです。RとLを正しく区別して発音しないといけませんとか言って、自信を無くさせてしまう。

大石 英語は国際共通語になっていますが、それは別に一つの英語を指すわけではなく、いろいろな英語を意味します。これだけ世界中の数多くの人達が英語を話す場合、それぞれの母国語の上に英語を使っているわけですから、文法や発音もそれぞれ微妙に違う、異なる英語が形成されている。私はそれでよいと思います。そのような多英語主義で現在の国際社会が動いていますから。発音がどうこうというよりも、コミュニケーションの中身の方が大切です。外国語を学ぶもう一つの理由として、日本語をもう一度考えなおすということがあります。翻訳する際に的確な語が見つけれられない。それは英語が出来ないのではなく、日本語が出来ないのです。母国語の背後にある文化を考えながら学習する、その上で国際的視野を持つことが、もう一つの意義でしょう。

論理的言語活動として

杉本 それには、論理とその階層構造がきちんとした日本語を書けるかという問題も大きいですね。外国語を学ぶと、そういうことを考え直すことにもなる。大学院生になって英語で論文が書けないのは、英語が書けないからではなく、日本語でも書けない人の場合がほとんどです。先ほど翻訳すると言われましたが、私としては、異なる言語は概念体系も違うのだから、翻訳する必要はないと思います。例えばtakeという語は、英語民族にしたら一つの単語なのだから、一つの概念の表現です。日本語でああ訳したりこう訳したりしても、ややこしくなるだけです。それより、異なる概念体系で構成されている言語を学ぶと、物事を



◀ **杉本 大 一 郎**（大学通信編集委員会委員長）

見るのに多角的なアスペクトが身につくことのほうが重要です。姫野先生の最初の話で、概念の衝突とかいう言葉がでましたが。

姫野 外国語学習では、語学に強い人と弱い人がいることを痛感します。そのことを4つの視点からまとめてみましょう。第一は、聴覚型と視覚型です。多言語国家のフィリピン、マレーシア、シンガポールの人達は聴覚型で、まず耳から入ります。日本人は視覚型でしょう。漢字を読んで目で確認するという思考法が来ていますから。特に年配になるほど文字を見なければ納得出来ない。それが上達しにくい理由の1つだと思います。放送教材も音声だけで聞き取る訓練をすると、いいと思います。



◀ 姫野 昌子 (人間の探究 教授)

第二は、自国の言葉がきちんと出来るかどうかです。外国人でも自国語での言語能力が不十分な人は、やはり日本語を学んでも駄目なようです。第三に、翻訳をする癖のある学生は駄目ですね。外国語が流れてくるとき、私達はその中の分かる言葉を捉え、つなぎながら理解していきます。そのような類推力がつくのは、訓練の結果だと思います。全部翻訳して頼っていく癖のある人は、思考の流れが分からない時点でストップし、あとの音が入らない。一度つまずくと、後は全部聞けない。そういう人は上達しません。分からなくてもいいから、とにかく流れに乗って聞いていると、いつの間にか分かるようになり、聴解力がついてきます。第四に、これは英語教育の話ですが、文章のうち20%の単語の意味が分からないと、全体を掴むのは無理だといわれます。単語は言葉を構成するものですから、楽しみながら覚えることが大切です。

山岡 例えて言うと、次のようになりますか。野球を知っている人が、それまで知らなかったゲームをする。そのとき、いちいち野球の場合に対応させたりしないで、新しいゲームをその場で真似る。そして繰り返しやって身につける。言語も同じだと思います。ゲームをするとき、ある程度そのルールを知らないと参加出来ない。それは最低限の合意で、言語の場合には最低限の文法にあたるでしょう。

杉本 翻訳の話ですが、特に日本語とシンタックスが違う言葉では、単語だけでなく、考える順序まで違うので、話される順序のまま、翻訳せずに理解していく癖をつける。また、実際に何%聞きとっているかということですが、われわれが日本語を使っているとき、80%も聞いているかどうか分からない。人間は不思議なことに、聞き飛ばしてよいことと、そうでないことをきちんと弁別する能力、雑音と必要な情報を選び分ける能力を持っていますから。

単位をそろえるために

杉本 話は尽きませんが、最初の問題へ戻って、どういうふうに学ぶと必修単位がとれるかを念頭に置きながら、一言ずつ。

大石 姫野先生のご指摘のとおりだと思います。放送大学の外国語教員の間でも、CD-ROMを一部の教材に付ける計画を進めています。実現すれば、放送教材とは多少異なりますが、重要箇所を繰り返し聞きながら学習出来るでしょう。言葉に特有な調子を耳でつかむと、雰囲気や文化も学びとれると思います。いっぽう、外国語が出来ないという学生には辞書を引かない人が多いという印象をもっています。それは傲慢で、ある程度の努力や犠牲を払う必要があると思います。面接授業は言葉を運用する場でもありますから、放送授業と相互補完的に使うと有効です。

宮本 繰り返しになりますが、私のお勧めは、一つの外国語でⅠからⅡに上がっていく。すると4単

位とれます。残りの2単位は面接授業か、他の外国語で充足する。**姫野** 楽しく勉強する、易しいものをたくさん読んでたくさん聞くというのがコツだと思います。その流れに身を浸して要点を掴む。探偵小説や恋愛小説でも、映画でも。留学生でも漫画やドラマをよく見ている人達、よく遊ぶ人達は、日本語を結構身につけていました。

杉本 小説は比較的難しい。もっと易しいものに、実用の配布文書などがあります。自分自身が日本語を身につけるのにどのくらい辞書を引いて来たかを考えると、語彙をつけるのに、辞書よりも、もっと大切なこともあるようです。とにかくたくさん使う。最後に、山岡先生、全体を見てご批評を。

山岡 身につかないことに関して、自信を喪失しないよう、今日の座談会が役立ってくれればいいと思います。コツがあるのではないかということも感じ取ってほしい。言語は使うことを想定して覚えなければいけない。他の科目と違って、印刷教材を読んで理解しただけでは、試験でうまくいきません。それはなぜかも考えてほしいです。



◀ 山岡 龍一 (社会と経済 助教授)

杉本 皆さんのお話を聞いていて感じたことに、それぞれの先生の考えには共通な所も多いが、ものの言い方も発想の原点や価値観も、違うところが多いのが目立ちました。問題には、そのくらい色々な側面があるわけです。だからある側面に拘泥して自信を喪失したりせずに、それぞれの生活の場に合わせて、大いに自信を持って外国語を使ってほしいと思います。

退任のあいさつ



2000年4月に放送大学に着任しましたが、その前にも、「家庭の経営（89）」などを客員教授として担当していましたので、放送大学とのお付き合いは16年余になります。

卒業研究報告書や修士論文の指導を担当したのは、短い期間でしたが、私は生活経験豊かな学生さん方から多くのことを学びました。私が担当した学生さんの中には、問題意識が現実社



平成12年4月、新潟大学から放送大学に転任しました。これ以降、週1回、時には週3回に及ぶこともありましたが、新潟と海浜幕張の通勤が始まりました。この間、1回だけ会議を忘れましたが、大きく遅刻することなく過ぎました。これまでの遅刻の常習犯が模範的になるというのは、よほど緊張してい

学生さん方に脱帽 !!

生活と福祉 教授 原 ひろ子

会の抱える課題に根差している場合が多く、その中には、未だ職業的研究者（つまり、学者たち）の学会発表や学会誌論文のテーマとなっていないものもありました。学際的あるいは総合的視点にたって、その指導に当たることは、生活研究および文化人類学・女性学・ジェンダー研究に携わる私にとって、大きなチャレンジでした。そして、「このようなテーマに取り組むことも放送大学ならではの妙味!!」と感じて参りました。

放送大学本部及び各地の学習センターの専任・客員の諸先生方からも、たくさんの刺激を受けました。セミナーハウスを大いに利用させていただき、管理

人の方々にも大変お世話になりました。深夜・早朝に出入りすることの多い私は、守衛さん方のご協力にも感謝しています。制作部や教務部その他の部署の職員の方々には、いろいろご迷惑をかけることも多く、お詫びと共にお礼を申し上げます。

今後いくつかの授業科目が残っているので、しばらく皆さまのご縁は続きますが、どうぞよろしくお願い致します。

そして、放送大学の卒業生・在学生のみなさま、その他、あらゆる放送大学関係者の皆様方のご健勝とご発展をお祈りしております。

苦しみと好奇心の間で

発達と教育 教授 橘 玲子

たのではないかと考えています。私は、長い間、医療領域で心理臨床活動を中心にしてきましたので、放送大学の放送番組・印刷教材を作る仕事には苦しみと好奇心のせめぎあいを感じました。

就任1年目に、馬場謙一先生と一緒に「カウンセリング概説」を作ることになり、何がなんだか分からないうちに教材を作り、翌2年目は大学院立ち上げのためにカリキュラムや約束事や規則の準備で(臨床心理プログラムのコーディネーターとして)、これまたやり慣れないことでした。しかも臨床心理プロ

グラムは他と違って、戸惑うことだらけでした。岩永先生から気分的に助けられたことを感謝しています。5年目の今年は、「カウンセリング概説」、「臨床心理学特論」(4単位)の主任講師で、新年になっても校正が済んでいない状態です。最後の年のこの2科目は大試練でした。

舞台に上がるときよりも降りるときの方が難しいと言います。月並みですが、大学でお会いした先生方や事務職員・学生さんたちの幸せを願って退任のあいさつといたします。



感謝とともに

人間の探究 教授 山内 久明

た。その流れの中で、1960年代の大学新設や「公開大学」の開学が実現するのを目の当たりにした。

「放送大学」発足に際して、はからずも「客員」として科目制作に参加することになった。発足に先立ち専任の数は極端に少なく、諸種の会議には客員予定者までもが招集された。制作は六本木のテレビ朝日と、溜池の日本短波放送のスタジオ。学期は三学期制で、制作終了直後の1984年、一年間再訪中のケンブリッジで、通信指導問題並びに単位認定試験と、合わせて六種類の問題を一気に作成して郵送した記憶がある。

以来客員を続け、2002年に専任として着任、その前年を含む三年間に四科目の制作に関与したに過ぎないが、組織に所属し、教職員ならびに学生の人たちとの交流を通じて、客員では知り得ない多くのことを学ばせて頂いた。国立大学の独立法人化、大学評価、社会人再教育、通信制教育の普及などで国内の大学が揺れ動く一方で、海外の「遠隔教育」と「生涯教育」が進化し国境を越えて「遠隔化」する状況にも対応を迫られる本学の一層の発展を、感謝とともに祈って止まない。



短くなかった5年間

自然の理解 教授 岩村 秀

学離れを考える」の制作を通して、中島、波多野両先生とご一緒に、今日的に重要な主題の1つに取り組むことができたのが一番印象に残っています。成人の科学に対する興味のもち方と理解の水準で、わが国はOECD加盟主要14ヵ国の最低に位置しており、若者はこのような大人の科学離れの姿を目の当たりにして、次第に科学離れ・学習離れを起こしているという現状をよく認識することができました。逆説的に言うならば、「これは今日の深刻な問題であるようだ」と多くの学生が受講するような社会・時代背景にあるのであれば、この科目は生まれな

かったと言えるのかも知れません。

最近のOECD及びIEAの調査報告を注意して読むと、わが国の小中学生の読解力及び数学・理科の成績は世間が騒いでいるほど悪くはなく、むしろ「数学・理科の勉強はおもしろくない、その意味も見出せない」等という学習意欲の低さにより深刻な問題があることが分かります。本学においても、生涯学習を目指して入学してくる学生が当初に持っていた学習意欲を萎えさせないよう一層の配慮をすることが重要であり、その検討が始められていることを大変心強く思っております。



もうひとつの学びから

自然の理解 教授 岩槻 邦男

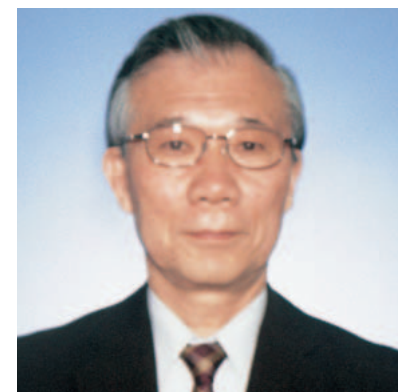
放送大学に5年間お世話になりました。京都大学、東京大学、立教大学とそれぞれに特徴のある3つの大学を経験したあとでしたので、短い期間でしたが、放送大学から学ぶことも山ほどありました。自分が学んだほど、貢献できたかどうか、考えてみると内心忸怩たるところがなきにしもあらずですが。

東京大学でも、(当時の)理学部附属植物園にいましたので、社会教育には部分的にかかわっておりましたし、日本学術会議でもこの分野の議論に参画しておりましたが、本格的に生涯教育に専念するのは、放送大学ではじめての経験でした。もっとも、本学在任中の後半は博物館にも関与するようになりましたので、さらに生涯学習支援一般に対象は拡大してはおり、この大きな課題に取り組むことに、年甲斐もなく、生き生きとしております。

放送大学では、多様な学生に接することができ、学ぶことに

意欲的な人々とともに学ぶ喜びを味わうこともできました。通学制の既存の大学では学ぶことができなかった人たちが、通信制の特徴を生かして学習する姿はたいへん美しい発見でした。もっとも、大多数の学生とは、直接的なふれあいの機会がなく、試験の結果だけではたしかな手応えがなく、隔靴搔痒の感を覚えることもありました。

人は多様な生物のうちで唯一知的活動をする種です。生涯を通じて学ぶ喜びを積み上げることを放送大学が支えていけるように、ますますのご精進とご発展を期待いたします。



学習センターからの想い

石川学習センター所長 藤田 暁男

識を有する学生に接すれば接するほど増幅していったと言えるでしょう。またそれだけに、新しい社会問題との出会いに価値ある刺激を多く得ることができたことも確かです。

上記の短い経験からも、これからの放送大学がこれまでの「教養学部」とは違った(あるいはその「進化」としての)新しい形の教育パラダイムを形成し、放送大学特有の多様な学生に対応しうる教育システムを創造していく必要があることを強く感じます。この点に関連し、丹保学長の提唱を契機とする「カリキュラム改革ーレベリン

グとクラスタリング」は画期的な意味があると思います。ことに、学習センターの今直面している入門レベル、高いレベルの質問・学習相談問題や社会人教育と高等教育との「ずれ」の問題等は、「レベリング」にかかわる教育システムの改革と深くかかわっているように思われます。

最後に、放送大学で出会った魅力あふれる教職員の方々に、そして、学生の皆さんに、いろいろな喜びとご教示を頂いたことに対し、心よりお礼を申し上げる次第です。

「放送大学フェア」を 全国生涯学習フェスティバルに出展



学習センターを活用した学習方法、衛星放送・CATV・地上放送の仕組み等について、愛媛学習センターの多くの学生さんに協力していただき、より解りやすく説明しました。来場された多くの方々からは、授業内容や学習方法などについての質問・相談があり、放送大学への関心の高さが感じられました。

また、放送局でもある本学の特色をアピールするために、例年人気の「ミニスタジオ」を今回も開設し、今年度の授業番組の紹介ビデオを再生したり、テレビの合成技術を活用して、来訪者に背景画との合成写真を贈呈しました。今回は「ふしぎ体験コーナー」として、沖縄の美しい海中の動画と来場者との合成し、さも海中にいるかのような体験を味わってもらった上での写真撮影とあって連日大好評で、写真が仕上がる間に、アンケートの協力をお願いし、本学をさらに広く知ってもらうことができました。

「附属図書館所蔵コレクション展」では、『ちりめん本が伝えた日本一挿絵に見る生活と文化』を出展しました。「ちりめん本」とは、和紙に多色木版刷りで挿絵を入れ、文章を活版で印刷した後に圧縮加工を施すことで縮緬布のような風合を持たせた欧文和装本で、明治から昭和初期に出版されていたものです。当時、海外へ数多く輸出されることで日本の文化を世界に伝えた「ちりめん本」には、英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語などに翻訳された「桃太郎」「花咲爺」などの日本昔話や小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の民話絵本のほか、日本人の暮らしや風景を挿絵にしたカレンダーなどがあり、その多彩さに、多くの来場者が見入っていました。

さらに本フェアにあわせ、愛媛学習センターにおいて10月10日

（日）から10月12日（火）の3日間にわたり、本学の原ひろ子教授、及び地元の客員教授による5つのテーマの公開講演会が開催されました。

また、文部科学省・愛媛大学との共同開催で10月9日（土）に「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」が行われ、全国の大学等の公開講座関係者約200人が集まり、研究討議も行われました。

今回のフェスティバルは、2つ



の展示場に、約5千人の方々の来場があり、多くの方に参加していただきました。フェスティバルへの参加にあたっては、多くの方々からの協力のもとに無事終えることができました。特に愛媛学習センターの多くの学生さんには、多大な協力をいただきました。この場をお借りして感謝を申し上げます。

次回の第17回全国生涯学習フェスティバルは、鳥取県において、平成17年10月9日（日）～15日（土）まで開催される予定です。



「ちりめん本」カレンダー

岐路に立つアジアの公開・遠隔教育

人間の探究 助教授 大石 和欣



平成16年11月26日から12月1日にかけて上海電視大学において第18回アジア公開大学連合年次会議が行われた。本学からは丹保学長以下、坂井助教授、大石助教授、松崎学習センター支援室長補佐、遠藤企画課係員が参加したのに加え、『大学の窓』取材班が同行した。

上海へ躍進する混沌

上海テレビ塔の下に立って周囲を眺めると、斬新でスタイリッシュな超高層ビルが威容を構え私たちを睥睨している。その高さ、洗練された雰囲気は東京のお台場や新宿の高層ビルをはるかに凌駕している。もちろん古い上海の街並みも旧居留区に残るが、そこでは恐ろしい数の車が車線を見失って疾走し、その脇を夥しい歩行者と自転車の群れが流れている。近代と過去、進歩と無秩序、野心と活気、それらが一緒くたになって猛進しているのが現在の上海だ。

上海電視大学が主催した第18回アジア公開大学連合（以下AAOU）年次会議はまさにこの躍進する混沌ともいべき上海の状況を反映していた。会議10日前になっても会議スケジュール詳細が決まっていなかったりしながら、いざ当日になると完璧にリハーサルされた大規模な舞踏や音楽の演出で出席者を歓待したのは驚いた。スピーチや視察ツアーに関しても情報が錯綜していたが、参加してみれば非常に行き届いていたのには感心した。

AAOUの中で一番活気があるのは中国とインドであろう。学生数の伸びが桁違いである。サー・ジョン・ダニエル（Commonwealth of Learning会長）

が「2人の巨人」と両者を評したのは当然である。公開教育における両国の躍進ぶりは、AAOU次期会長選挙で中国中央電視大学長とインドの国立インディラ・ガンジー大学長が競り合ったことでも明らかだ。結果的には中国が次期会長に選出されたが、それだけ両国を中心にしてアジアの公開・遠隔教育が今後展開していくと人々が判断したのだ。

実際のところ主催校である上海電視大学をみても、現在11万人の学生数を誇り、その数はさらにすごい勢いで増加する徴候を見せている。単に講義番組を制作するだけでなく、上海教育集団の一部として地元のメディアと合同で教育ニュースを流したり、さらにはインターネットを最大限に活用することでより多くの人々に大学教育の機会を広げようとしている。電視とはテレビのことであるが、それが電脳、つまりコンピューターと観念的にもまた経営上にも可換的な関係を保っているのは注目に値する。同じ「電」という漢字を使うだけあって教育手段については柔軟なのだ。彼らにとっての問題はどのメディアを使うかということではなく、カセットからコンピューターまで多様化するメディアを総合的にどう活用し、いかに質の高い教育を、どれだけ多くの人々に提供できるか

ということである。このテーマは中国全体の公開大学、そして韓国や香港といった公開教育先進国・地域においても言えることである。今回のAAOU年次会議が「全ての人に質の高い教育を（Quality Education for All）」をテーマに議論を繰り広げたのは理想を追求するのではなく、現実問題として教育メディアの多様化の中でこの教育の質の問題が切実になっているからなのである。

多義化・多様化する公開教育

しかし、問題は単純ではない。公開教育は英語ではOpen Educationだが、このopenの意味が今や一義的ではない。全ての人が無試験で入学できるということだけでなく、全ての人を同等に扱う教育という意味でもある。さらに学生の知的興味に合わせた柔軟な指導方法と教育カリキュラムを提供するという意味もある。現在ではそれらに加え各学生の状況に合わせた柔軟かつ多様な教育メディア利用という意味も付随する。同じアジアといっても国・地域によって教育環境が大きく異なっている。多義化した「公開教育」をどれだけ意識化し、教育システムに反映させているかは国それぞれであろう。

教育メディアの多様化は教育の質の問題と直接関係してくる。どのようなメディアを使うかが学生の教育の機会や学習方法まで左右



平成17年度開設改訂科目紹介

発達と教育の心理学的基盤（05）

発達と教育 教授 波多野 誼余夫
千葉大学 教授 稲垣 佳世子

教育というとたいていの人は学校での教育を思い浮かべるだろう。それで、「発達と教育」という専攻も、なんとなく取っ付きにくい、と思う人も多いだろうが、それは違う。生涯発達という言葉があるように、発達が生まれてもない時期に限られていないのが人間の特徴だし、人の生活ではいろいろなところに教育があり、学校で行われているのはそのほんの一部にすぎない。

この科目は、こうした発達や教育に関する心理学、認知科学の新しい基本的見解を紹介することを意図している。専門の教育者はもちろんのこと、ごく普通の人々も、直観的には、発達や教育についてそれなりの見方を持っている。経

験をつんだ人の直観なら、その経験の範囲内ではほぼ妥当なものであることも多い。しかし経験にもとづく直観の見方は通常、自覚化されておらず、他の人たちと容易に共有しうる知識にはなっていないし、そうした見方と首尾一貫した実践をいつも導けるわけでもない。経験そのものが偏っていたり、経験したのと多少とも異なる場面に適用することが求められると、明らかに不適切な指導を生み出すことさえある。この意味で、実践者

の持つ直観の見方を心理学や認知科学の知見によって補強したり、洗練したり、吟味しなおしたりすることが重要になってくる。

発達と教育に関する心理学や認知科学の知見を紹介しようという本科目の意図は、ここにある。



波多野教授



稲垣教授

日本の製造業の新展開（05）

産業と技術 教授 森谷 正規
一橋大学 教授 小田切 宏之

日本の製造業は、第二次世界大戦後に急速に発展し、大量生産製品を中心に強大な国際競争力を持つに至ったが、1990年代に入るところから、その強さに陰りが見え始めている。大型の画期的な新製品、新技術が生まれがなくなり、また韓国、中国など低廉な労働力を活かす新たな競合相手が出現したことによるのだが、これからは、各産業、各企業は、日本の強さを活かす新たな方向に展開していかねばならない。それがいかなる方向であるのかを、国際的な視野から展望した。

取り上げた産業は、電子機器、電子部品、バイオテクノロジー、医薬品、自動車、工作機械・半導体製造装置、大型機械システム、

社会機器システム、鉄鋼であり、それぞれ専門の研究者五人が論じている。産業論の大学教授と受託研究機関（いわゆるシンクタンク）の研究者であり、深い知見をもとに、現状を分析して将来を洞察している。

21世紀の日本の製造業は、大きく変わる世界、変動する日本社会に対応して、大きな改革に進まねばならない。より高級な高度な製品を目指す、核となる部品や材料に力を注ぐ、社会に新たな市場を創っていく、

国際的な連携を深めていくなどであるが、それを具体的にはいかに進めるべきかを、各産業において把握することができる。

“モノ作り”における日本の強さを再認識するのに役立つ授業である。



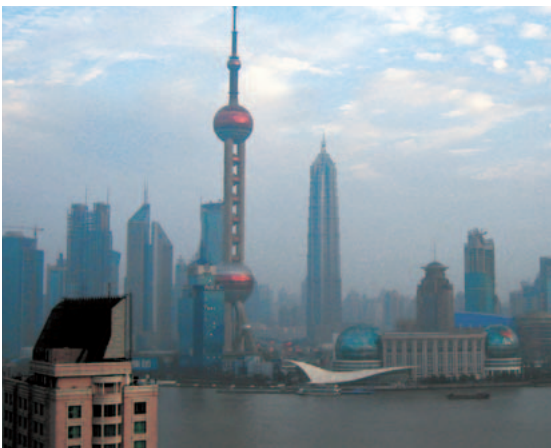
森谷教授



小田切教授

するという環境が禍し、深刻な学生数減少に悩む。解決策として経営効率化と教育の高質化を図ると同時に近年eラーニングを導入したが、それでも好転しない環境に苦しむ。韓国と肩を並べてアジアで先進的・指導的立場に立つ香港公開大学もまた難しい経営局面に立つ。少子化に加えて、経済の失速、さらに打撃だったのはインターネット等を使った海外の公開・遠隔教育機関の市場参入である。早期から設けたMBAコースは当初市場トップの40パーセントを確保していたが、海外MBAコースが参入した途端一気に57番目に落ち込んでしまった。いわば「教育のビッグバン」の犠牲になったのだ。

アジアの公開・遠隔教育は多様化のなか一つの大きな分岐点を迎えている。中国とインドの活気と台頭に対して古参の韓国や香港の公開大学の苦悩、郵便やラジオやテレビといった旧来のメディアに対して「eラーニング」、果てには「mラーニング」の広まり。どれが教育メディアとして有益かではなく、多様なメディアの中でどのように教育の質そのものを確保すべきか、それが問題である。今回のAAOU年次会議はいわば「教育の質」という教育の原点に立ち返ることで、それぞれの公開大学の抱える問題解決の糸口を見出そうとした試みといえよう。その質の基準と評価方法の問題の多さと大きさが露呈されることで逆にその重要性が認識された。当たり前のことだが、学生と社会に認められる教育の「質」そのものを保証することこそが混沌としたアジアの公開・遠隔教育にとって最重要の任務であると同時に、分岐点を生き残るための明るい道標の一つなのであろう。



きている。いわば第三世代遠隔教育である。デズモンド・キーガン氏（国際遠隔教育社会長）は基調講演で、既に携帯用コンピューターだけでなく、携帯電話によって学習を行ったり、あるいはその補助を行っているケースが増えている現象を報告した。それはヨーロッパ地域だけではなく、アフリカでも行われている。もっともアフリカでは不便な郵便事情を補助するために簡単な事務連絡や手続きをする程度ではあるが、比較的普及率が高い携帯電話を利用する点は進歩的である。

「危険で不安な」分岐点

メディアの多様化はアジアのあらゆる公開教育機関にとっても急務な対応を迫られる。サー・ジョン・ダニエルは基調講演において、国際政治と同様に公開・遠隔教育においてもわれわれが「危険で不安な世界」にいと警鐘を鳴らした。取るべき道は無数にあるが、一步間違えれば瀕死の重傷を負う。解決策としてヨーロッパやアメリカではなくインドや中国をモデルとして学ぶべきという彼の提案には説得力がある。彼が以前提唱した費用（cost）、質（quality）、機会（access）の三角形がインドの公開・遠隔教育運営においてはもはや機能せず、それに社会性・現実的な観点（relevance）と機関の収益を図る経営管理体制（governance）を加えた五角形が明らかに公開・遠隔教育の重要指針になってきている。実際、インドの公開大学では就職やキャリアアップのためのカリキュラムや資格授与を加味したコンテンツを増加した結果、授業料収入も倍増し、それにより政府への依存（＝政府からの干渉）を断ち切りより高質かつ独自のカリキュラムを推進することが可能になった。この五角形は教育の質や機会を改善し、結果的により大きな五角形に成長するのだ。

サー・ジョン・ダニエルの指摘の背後にはそれだけ経営難に直面する公開大学が世界に多い事実がある。韓国国立公開大学は少子化に反比例して国内の大学数が増加

するため、結果的に教育効果にまで影響を与えることになるからだ。今回の会議での発表の多くが教育メディアと教育効果の関係に焦点を当てていたのも当然だ。eラーニングが自然と注目されるが、必ずしも高質の教育を保証しているとは限らないし、評価さえ定まっていないのが現状である。坂井助教授の発表はその意味で重要な指摘をしたといえる。放送大学生への調査結果をもとにして、eラーニングをはじめとする遠隔教育が実際に効力をもつためには、教員から学生への知識伝達だけではなく、学生間の相互作用効果も授業のなかで重視されるべきだとする考察を行った。また香港公開大学の張偉遠は独自の教育効果基準をスケール化し、それにより数カ国で行われているインターネットによる外国語教育の質を調査した結果を示した。上海電視大学の魏志慧も、インターネット教育における履修者と教材および教員との相互影響から教育の質を評価する優れたインデックスを実験結果をもとに示した。

ここで重要なのはアジアの公開・遠隔教育がeラーニングを活用しつつあるということではなく、それを含めて学生にとっての教育の質を問題にし、国際的なレベルで評価をする段階に来ているという事実である。大石が発表で指摘したように、日本ではe-Japan計画の下でeラーニング活用も政策の視野に入る一方で、現実としてそれを利用する大学機関の数は国内全体の2%と少数であり、それも実験段階がほとんどだ。さらに深刻なのは学習者にとっての公開・遠隔教育の質を評価する基準もないし、また研究さえあまり行われていないことである。

公開・遠隔教育のメディアの多様化が世界レベルで急速に進んでいることを考えると公開・遠隔教育の日本における専門的研究の必要性は急務であるといっている。日本では「eラーニング」が根付いているとは到底言いがたいなか、世界では既に「mラーニング」つまり「モバイル（mobile）学習・教育」に移行する兆しが出て



微生物を友に

愛知学習センター所長 塚越 規弘

パの研究者と共同研究することが多かった。最近ドイツの共同研究者が共著論文(J. Mol. Biol. 342, 515-524(2004))を発表してくれた。

愛知学習センターには立派な実験室が設備されており、自分の研究と共にDNA実験を主体としたバイオゼミを開講している。自分の研究では麴の褐変化（黒粕）における銅イオンの働きについて解析できる条件をようやく確立したが、所長として空いた時間しか実験できず、進み具合が遅いことに悩んでいる。しかし、オンラインジャーナルの

お陰で最新の専門知識を容易に得ることができ幸いである。

バイオゼミ実験ではGFP遺伝子で形質転換した光る大腸菌を作出し、時には見学者にお見せしている。また、Thermal Cyclerを購入していただいております。毛根細胞のDNAを用いた個体識別、組換え大豆、納豆、豆腐からの除草剤耐性遺伝子の検出などが可能となっている。今後ともより多くの放送大学の学生にPCRを体験してもらい、組換え食品の安全性などについて自ら考え判断できるように指導したい。



研究室へ集え

人間の探究 教授 本多 俊和
(スチュアート ヘンリ)

調査ノート、インタビューテープ、写真、そして出先で入手した報告書やビデオ・CDなどの山ができる。研究室は、それを整理してデータベース入力する作業を手伝う研究補助員（助手）との共同作業の場と化する。

私の研究テーマは、先住民をめぐる社会・文化的な状況を歴史的な視点からみるとともに、国民国家における先住民の現状を追究することである。最近は、先住民とメディアの関係を調査しているが、今とくに関心を寄せているのは、メディアとしての博物館の調査である。

研究室のもう一つの機能であ

る「教室」は、放送大学においてもっとも重要な役割である。毎週の授業がないので、学部生と大学院生のゼミを年に10回——必ずしも目標に達していないが——開くように努力している。ゼミは学習センターで開いてもよいのだが、少人数なら、研究書が本棚に並び、学会案内や最近の調査資料が散らかっている研究室の雰囲気の方がゼミを大いに盛りあげてくれるのである。

在室のときは、ドアを開けっ放しにして、学生がいつでも気軽に来られる、そういう研究室でありたい。

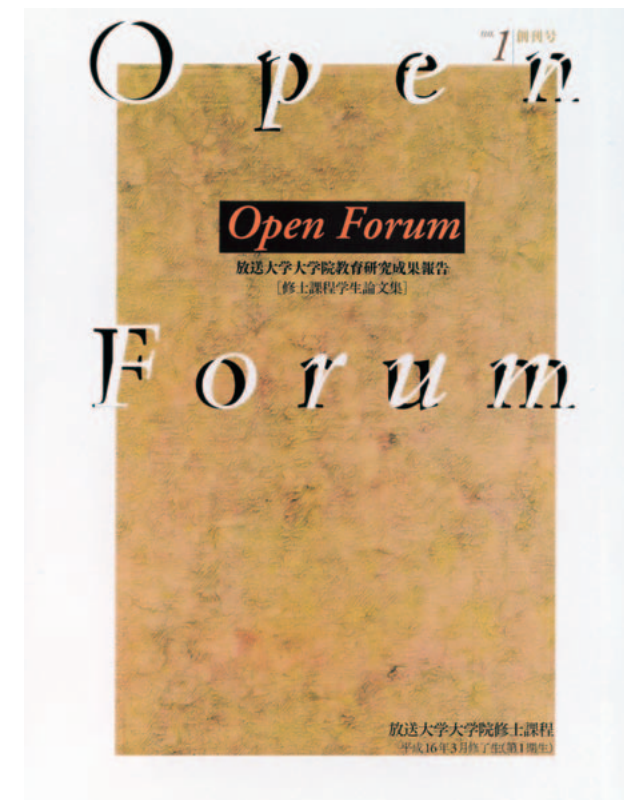
Open Forum の刊行について

Open Forum 創刊号編集委員 工藤 庸子

放送大学大学院の学生たちは、どのような環境で、どのような目標を立てて学んでいるのだろうか？ どのような形で教員の指導が行われているのだろうか？ 実際のところ、学生による研究の成果はどの程度？——そんな疑問にお答えするために、Open Forum（教育研究成果報告）が刊行されることになりました。

創刊号の内容は、平成16年3月の修士課程修了生（第1期生）の修士論文を基にした「学生論文集」です。修士論文そのままではなく、一般の「紀要論文集」の形式で、新たに書きおこされた文章を編纂したものです。在学生の皆さんにとっては、学習と研究の指針、そして大きな励みとなるにちがいありません。修士課程への進学をお考えの方も、願書を出すまえに、ぜひ手に取ってみてください。どのプログラムで、どのような方法論の、どのような研究テーマが立てられているか、実例にそって検討していただきたいと思います。

私たち教員にとっても、「学生論文集」は自己点検・自己評価の貴重な素材となるでしょう。企画・編集に携わる者として早めの感想を述べさせていただくなら、社会人としての経験を背景にした真摯な問題設定と、年齢とは相関しない知性の瑞々しさに、私は新鮮な驚きを覚えています。執筆者の方々、論文のコメントを書いてくださった先生方の熱意のおかげで、Open Forum 創刊号は「生涯学習」「社会人教育」の醍醐味が伝わる媒体になるものと期待しています。



Open Forum は、その名のとおりに「開かれた知の広場」となることを目指しています。これは学内の営みというだけでなく、放送大学から社会に向けた情報発信・広報活動の一環でもあるのです。一般の読者にも読んでいただけるよう、デザイナーの全面的なご協力をいただき、最先端の印刷技術を駆使した美しい冊子をお届けします。刊行は3月中旬の予定です。

Open Forum は、一般の方々も入手できます（価格は800円程度を予定）。詳しくは、放送大学教務部修学支援課までお問い合わせください。なお、入手方法等については、後日、放送大学のホームページ（<http://www.u-air.ac.jp>）でもお知らせする予定です。

お問い合わせ先
放送大学教務部修学支援課 TEL 043-276-5111（代表）

教務のお知らせ

平成17年度第1学期教務スケジュール

学部（教養学部）								
月	4月		5月	6月		7月	8月	9月
第1学期の学習	授業	1(金)	28(木)	6(金)			21(木) 22(金)	30(金)
	放送授業期間	ゆとりの期間		放送授業期間		集中放送授業期間		
	23(土)					3(日)	4(木) 21(日)	
	面接授業（毎週型・土日型）					面接授業（集中型）		
第2学期の学習	手続き等	下旬～上旬 通信指導の送付	通信指導提出		9(木) 必着	中旬 単位認定試験通知 （受験票）の送付	中旬 成績通知の送付	
		27(金) 消印	2(木) 消印	中旬 下旬 面接授業（集中型）の 科目登録申請		23(土) 29(金) 単位認定試験		
				面接授業（集中型）の 授業料納入				
				15(水) 消印		中旬 科目登録申請要項 の送付	27(水) 消印 10(水) 必着 第2学期 科目登録申請	上旬 科目登録決定通知 の送付
				平成17年度第2学期出願 （平成17年度第1学期末で学籍切れの学生）		31(水) 必着		
						下旬	合格通知書の送付	
						上旬	授業料納入	
						中旬	印刷教材の送付	

平成17年度放送大学大学院
文化科学研究科（修士全科生）入学者選考結果

高度専門職業人の養成を目的とする放送大学大学院（第四期生）に、549人が合格しました。

- (1) 合格者の概要
年齢層は、30～40歳代が約6割を占め、職種では、会社員・銀行員等が約3割、教員及び公務員がそれぞれ約2割でした。他大学卒業者が7割弱を占め、放送大学卒業者は3割弱でした。なお、本学の実施する出願資格事前審査（4年制大学卒業等の資格を持たない方の出願資格の審査）を経て合格した方は14名です。
- (2) 入学者選考状況
放送大学大学院では、平成14年度から、修士の学位の取得を目指す修士全科生（募集人員：500人）の受け入れを開始。17年度入学者分についても、第1次選考（書類審査）、第2次選考（小論文試験、面接試験）を実施し、合格者を決定。12月10日（金）に本人宛通知しました。

プログラム等	総合文化		政策経営	教育開発	臨床心理	計
	文化情報科学群	環境システム科学群				
募集人員	140人程度	130人程度	130人程度	60人程度	40人程度	500人
出願者数 (倍率)	244人 (1.6)	178人 (1.3)	229人 (1.6)	148人 (2.1)	1,028人 (23.4)	1,827人 (3.3)
合格者数	152人	140人	144人	69人	44人	549人

大学院（文化科学研究科）													
月	4月		5月	6月		7月		8月	9月				
第1学期の学習	1(金)	28(木)	6(金)				21(木)	22(金)	30(金)				
	放送授業期間		ゆとり の期間	放 送 授 業 期 間				集 中 放 送 授 業 期 間					
	下旬～上旬 通信指導 の送付		通信指導提出			9(木) 必着	中旬 単位認定 試験通知 (受験票) の送付		31(日)	2(火)	中旬 成績通知の送付		
第2学期の学習	9(土)	10(日)	17(日)	23(土)	9(月)			上旬 科目登録 申請要項 の送付		27(水) 消印	10(水) 必着	上旬 科目登録 決定通知 の送付	下旬 印刷教材 の送付
	研究指導 オリエンテーション (臨床以外)				研究指導 オリエン テーション (臨床以外)			第 2 学 期 科目登録申請		授業料納入			
								平成 1 7 年 度 第 2 学 期 出 願		合格通知書の送付			
							15(水) 消印					31(水) 必着	中旬 印刷教材の送付
									下旬			中旬	
									合格通知書の送付				
									上旬			30(金)	
									授業料納入				
									中旬			下旬	
									印刷教材の送付				

平成18年度修士全科生学生募集要項は6月15日（水）から配布を予定しています。
修士全科生入学者選考についての日程等詳細は平成18年度修士全科生学生募集要項を入手し確認してください。

夏季集中科目の学生募集が始まります

夏季集中放送授業期間に「司書教諭資格取得に資する科目」、「看護師資格取得に資する科目」を開設します。
学生募集等の日程は下記のとおりです。

	司書教諭資格取得に資する科目	看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	平成17年 4月 1日 (金) ～	平成17年 4月 1日 (金) ～
出願受付期間	平成17年 5月 1日 (日) ～ 5月 31日 (火)	平成17年 5月 1日 (日) ～ 5月 31日 (火)
放送授業期間	平成17年 7月 22日 (金) ～ 8月 7日 (日)	平成17年 7月 22日 (金) ～ 8月 16日 (火)
通信指導提出期限	平成17年 8月 15日 (月)	平成17年 8月 15日 (月)
単位認定試験	平成17年 10月 21日 (金) (単位認定試験レポート提出期限)	平成17年 9月 24日 (土) 平成17年 9月 27日 (火) いずれか1日を選択

「住所等変更届」の提出について（お願い）

ここ数年、印刷教材等について、受取人不在による返送が非常に多く見受けられます。

印刷教材等については、学生の皆さんが、放送授業等を受講される際に、学習に支障がないよう、迅速な発送を心がけておりますが、郵便という通信制の「命綱」がうまく機能しないことにより、放送授業開始時に教材がお手元に届いていないケースは、以下のことを行っていただくことで、その多くが解消すると思われます。

1.印刷教材等が、送付される時期には、郵便受けをこまめにご確認いただき、印刷教材等（第4種郵便）または、郵便局からのご不在連絡票が、投函されていないかどうかのご確認をお願いいたします。

特に、ご自宅等の郵便受けの投入口が、印刷教材等の小包を投入できない大きさの場合、教材等の代わりに、ご不在連絡票が投函されている場合がありますので、ご注意ください。

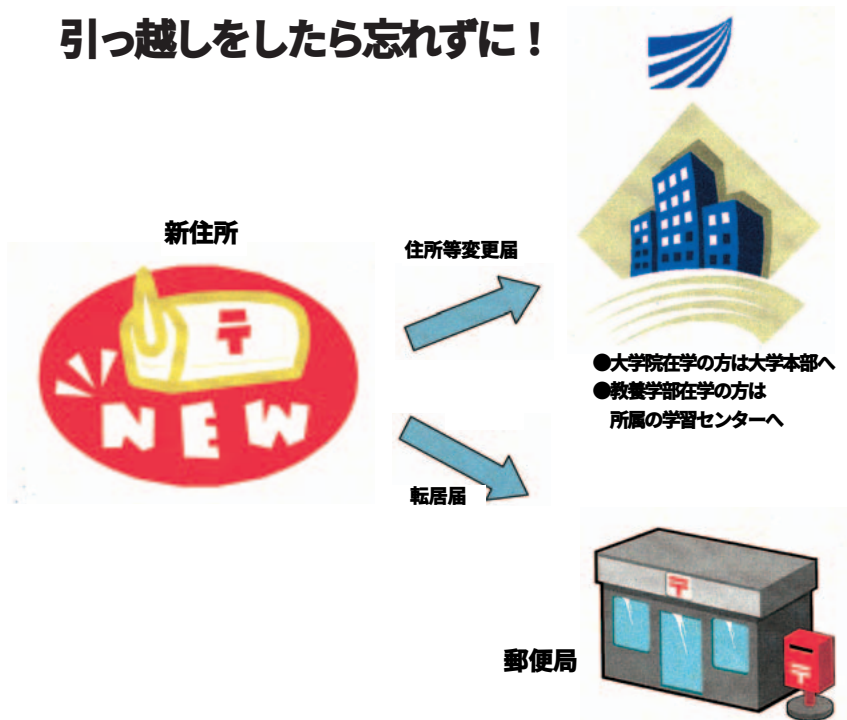
ご不在連絡票が、投函されていた場合は、速やかに、指定の郵便局に受取方法をご連絡ください。

2.現住所が変更になった場合は、「住所等変更届」を所定の提出先へご提出ください。

提出先は教養学部在学の方は所属学習センター、大学院在学の方は大学本部となります。

同時に、最寄りの郵便局へ転居届をご提出ください。

引っ越しをしたら忘れずに！



編集後記

太古の時代、人々は自然を恐れ崇拝してきた。自然の中に潜む圧倒的な力が自然と日々語る人々には自明であったからであろう。ある時代から、我々は「明るい理性の光の中」に歩むことを覚え、「非近代的」な文化の伝承を軽んじ、科学に由来する「人間の力」で自然の力を理解し終わりのない繁栄を築くことができると楽観するようになってきた。

だが、「人間の力」が自然の前にはとるに足らないほど小さいこと、にも関わらず自然の力の効果を巨大な災厄に拡大するほどに成長していることを昨今の出来事は表しているように思う。

「考える葦」という有名なフレーズに込められた謙虚で大胆な叡知に調和する科学の眼差しが求められているのではないだろうか。

（長岡 亮介）

大学通信編集委員会

（平成16年度）

委員長	教授	杉本大一郎
副委員長	同	香山壽夫
委員	同	齋藤高雅
〃	同	長岡亮介
〃	助教授	奈良由美子
〃	同	山岡龍一
〃	同	青山昌文
〃	同	杉森哲也

（編集事務担当
教務部学生サービス課）



放送大学学園

<http://www.u-air.ac.jp>

ISSN 1343-3369

R100